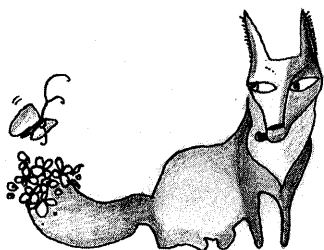


故国を後にして(3)

ひっそりと死にゆくもの

モーレンカンブふゆこ



大岡信氏が「折々の歌」に私の短歌をとり上げて下さったという報が入った時は、天地が動いたと思った。どれを、と息を殺して聞き入ると、受話器の向こうから、この歌がきこえてきた。

ひっそりと又死にゆくは何ならむ春の嵐に耐えていたれば

うれしかった。この一首には、長い歴史がある。

あの青春の日、みぞれの降るニューヨークの街角で、私は何かを失いつつあった。田舎で英語を学び、ゆくゆくは国際連合のような所でさっそうと秘書にでもなりたい、との夢も、実現してみると、雑用である。プロフェシヨナルになるには、最低社会科学系のマスター・ディグリーと、自国での実務経験が必要だ。田舎で英語教師をしている友人が、まぶしく思えた。結婚をして子を育て、小鳥のさえずに目覚めるような生活が欲しかったし、プロフェシヨンをもちたいというくやしさもあった。小さな下宿の壁に、スイスの山と泉のポスターを貼り、飢えというものをつくづく味わった。その頃、英詩をたくさん書いた。「私が欲しいものは、何なのだろう。孤独を癒す暖かさだけでもないし、社会の雑用をこなすことでもない。人生の根源的なものを追求したいのに。何だろうこの死んでいくものは、未だ生まれもしていないのに。」たしかそんな内容の詩だった。

あれからオランダに渡り、結婚して、子を育て、小鳥のさえずに目覚める夢も成った。田舎に籠って、毎日おしめをかえながら、私は又、何かを、失い

つつあった。

四十歳になって短歌を書き出した。「プロフェション」を目ざすには、あまりにもほかない試みだったが、水を得た魚のように、生き返った気がした。ニューヨークで書いたあの詩の一行一行を消していった。最後に、「死んでゆくのは何だろう」という一行が残った。

オランダで一番悲しかった時は、と聞かれたら、「朝日歌壇に初入選した時」と答える。日本にいたら赤飯をたいてお祝いする程の大変なことからいだが、あの喜びの瞬間、わけのわからない人が、こう言ったのである。

「たった一行アマチュア欄に名が出ただけで、大詩人のような顔をすするな。」
そうに違いない。しかし私は今もって、この言葉をくり返すと、こみ上げてしまう。あれからNHKのドラマの中で、須藤氏は「あなたは詩人です」というセリフを、ちゃんと入れて下さった。ドラマがイタリア賞にノミネートされたため、英訳ができ、皆読むことができた。オランダの放送局が、それを読んで、一時間のラジオ・インタビューを企画してくれた。今友人たちは私を誇りに思ってくれている。しかしあの瞬間の、何かが死んでしまいそうだったこと

を、私は長い間考えていた。

子らは大きくなり、私には、日本語教師という、ささやかなプロフェッションができた。日本人学校補習校も、通訳の仕事も、いたらずながら何とか務めている。家事子育ても、秘書も、立派なプロフェションだと、今では内省をこめて信じているし、詩人に、プロもアマもないのではないかとも思うようになった。

しかし、この「ひっそりと死にゆくもの」は何だろうか、いつも思う。何はともあれ、もう二度と、失いたくないものだ。

机きの砦き遙か故国の言葉もてかそけきものを守り居るかな

(歌人・アムステルダム補習校)